The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上代東西海上交通史話
Author(s)	桑田, 六郎
Citation	懐徳. 1952, 23, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90252
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上代東西海上交通史話

桑田六郎

運河　今日スエズ運河は紅海と地中海とを南北に直通連絡して居るが、古代では今の Ismailia（スエズ、ポートサイドの中間）附近から西方に運河を開き、ナイル河下流がいくつかに分かれて地中海に注ぐ中で、一番東方にある Pelusiac branch の Bubastis に連絡した。スエズ、イスマイリアの間には Bitter Lake があり自然に紅海に通じる。此の運河は今 Wadi Tumilat と云つて居る。運河の最初の發掘者はヘロドタスでは Necho 王（610-595 B. C.）となつて居るが、實はその以前 Seti 王の時に既に運河があつたことは Karnak の神殿の碑文に見える由、その子 Sesoteris 王が運河の東端に Heroopolis を建設した。その後ペルシアの Darius 大王も運河の完成に努力したと傳へられて居る。アレキサンダー大王の死後、エヂプトを領有して居た Ptolemy 家の時代にも Ptolemy 二世が運河の開通に努力したらしく今のスエズの附近に Arsinoe 港を建設した。然し Strabo は運河が開けたと云ひ Pliny は紅海の水位が高いので洪水を恐れて中止したと云つて居る、運河に就いては色々の說があつて分明せぬ所があるが Arsinoe の町は織物業の盛んな所としても知られた。その後ローマ皇帝 Trajan が南方に開いたと云ふ運河の話もあるが是もハッキリせぬ。とにかく此のナイル河の Pelusiac branch とスエズの Bitter Lake を結ぶ運河は第一に Pelusiac branch の舟運がよくなく、又一方 Bitter Lake やスエズ灣の淺瀨や風の工合も宜しくなかつたので、度々の努力にも拘らず餘り發展しなかつたらしい。商人は今の Akaba 灣頭にあつた Aelana 港に荷揚げし

て、そこから内陸交通の要衝であつた Petra の大市場に運んだと云はれて居る。この Aelam（Aila）港は昔ソロモン王がフェニキアの Tyre の王の援助により Ophir の金を求める爲め船團を作つた Ezion Geber であると云はる。Ophir の金に就いても今の何處かに就いて色々の說がありハッキリせぬが、紅海を下つて行つたことは確かである。

紅海の意義　今日吾々が紅海 Red Sea と云つて居るアラビアとエヂプトの間の狹い海は古代にはアラビアの海と呼ばれ、東方のペルシア灣と並び稱された。この紅海にあたる名稱としては古代にエリトラ海 Erythraean Sea がある。但しこのエリトラ海は廣くペルシア灣から印度洋、アラビア海を含めて用ゐられたもので、エリトラ海の名は既にヘロドタスに見える。その名の起原に就いては早くから議論があつたと見え、アレキサンドリアの Eratho-sthenes や Agatharchides は是は海の色ではなく Erythras と云ふ人名から來て居ることを主張した。彼はペルシア灣の沿岸に住んで居たが、或る日彼の家畜（牝馬）群が獅子に襲はれ、海上に逃れたので彼も海上に走り或る島に住むことになつたが、その後次第に榮えて數多の島々を領有する樣になり、彼の名が海の名に用ゐられるに至つたと云ふのである。Strabo によると Erythras 王の塚がペルシア灣内の Ogyris と云ふ島に殘つて居ると云ふ。それから著書は不明であるが紀元後一世紀後半に出來たらうと推定される「エリトラ海の periplus」Periplus Maris Ery-thraei と云ふ書物がある。periplus とは巡航の意味で、この書物はエリトラ海の案内記である。今此の書を基としそれにギリシアの旅行家で地理學者である Strabo 及びアレキサンドリアの天文學者である Ptolemy の Geography と、博物學者である Pliny の Natural history 等紀元後一、二世紀の著作を參考してエリトラ海の東西交通の狀況を次に述べて見よう。

紅海沿岸の諸港　話はエヂプトの Punt 遠征に溯る。第十八王朝の Thothmes 一世の王女 Hatasu（Hatshe-peut, Hasheps）は紅海の西岸で船隊を作り Punt に遠征させた。遠征隊は frankincense（乳香）の林に乳香を採

取した他、金、銀、象牙、黒檀、桂皮（cassia）、化粧墨（kohl or silibium）猿、狒々、犬、奴隷、豹皮等を獲て歸り、Punt 女王も隨行した。その有様は Thebes の近くに新に建てられた Ammon 神殿の浮彫に見ることが出來る。この Punt とは今の Somaliland 地方らしい。話は紀元前十五世紀の上代であるが、その後にも紅海を下つて Punt に交通することはあつたらしいが、どんな港から出發したか記されて居ない。所が Ptolemy 家がエヂプトを領有するに至つて紅海西岸に數箇の港が次ぎ次ぎと開かれそれらの港から輸入されたものはナイル河を下りアレキサンドリアに運ばれ、アレキサンドリアをして益々東西交通の大市場に發展せしめたのである。紅海西岸に諸港を建設したのは Ptolemy II Philadelphus (B. C. 285—246) の力である。彼が運河の開通に努力し、Arsinoe 港を今のスエズ附近に設けたことは既に述べたが Arsinoe は彼の妻の名であつた。然し運河は思ふ様に行かなかつたので、紅海西岸北緯 27° 12′ の所に Myos Hormus 港を建設した (B. C. 274) この港は西方ナイル河畔の Coptos (Koft) まで六、七日程で Strabo によると、その間に井戸を掘つたり雨水を貯へて飲料水を供給する watering-places があつた。又 Myos Hormus の南方北緯 23° 55′ の所に Berenice 港があつた。是は Ptolemy Philadelphus の母の名を取つて付けたもの、是も西方 Coptos に十一日程、八ケの Watering-pleces を經る陸路連絡があるが、途中からナイル河畔の Edfu とも連絡した。その後ローマ時代には Myos Hormus と Berenice との中間に Leucos Limen 港が開かれ、前兩者より榮えたと云ふ。對岸のアラビア沿岸には唯一の北緯 25° 7′ の所に Leuce Come 港があり陸路 Petra に通じた。Ptolemy Phiendelphus は又 Nubia の象牙貿易の爲めに北緯 18° 9′ の所に Ptolemais 港を設けた。

又その南方今の Massowa の所に Adulis 港があり、そこには Ptolemy 三世の征服碑があつた。是も象牙貿易港である。Periplus によると、紅海口にはアラビア海岸に Muza と Ocelis があり、後者は單に碇泊港にすぎなかつた。

アラビア南岸とアフリカ東岸　Ocelis を東に廻はると Eudaemon Arabia があり、今の Aden で、その東方の Hadramaut 地方は frankincense country で内地の Sabbatha がその都で、Cana がその港であつた。Cana 港には織物、衣服、銅、錫、珊瑚、蘇合香等の印度向けの物資も輸入された。一方紅海を出てアフリカ海岸に沿うて行くと、Avalites, Malao (今 Berbera), Mundu, Mosyllum の諸港が Cape of Spices (今 Guardafui 岬) までにあり、岬の南に Pano, Opone があつた。これらの地方は myrrh (沒藥) frankincense (乳香) の產地であるのみならず、印度の cinnamon (肉桂) copal (樹脂) macir (樹皮) 砂糖、牛脂油がこゝで輸出されて居た。このことは岬の沖にある Discorida (今 Socotra) 島の名が梵語 Dvipa Sukhadara "island of bliss" から來て居る如く、印度人の植民地で、Periplus にはこの島の住民はアラビア人ギリシア人印度人であると云つて居ることと併せ考へると、此の附近の地方は東西交通の仲繼ぎ市場でもあつたことがわかる。ギリシア人が交易に持つて來るものは織物、衣服ガラス、金銀器、武器等で、それを土產の香料、龜甲、奴隸及び印度からの輸入品の鐵、鋼鐵、綿布、モスリン、ラック (lac) 等と交換した。ギリシア人は岬を廻つてから更に遠くアフリカ海岸を南下し Azania 地方に至り Periplus には最南の地として Rhapta の名があり、Ptolemy は Prasum の名をあげて居る、後者は Cape Delgado (10° 30′ S) とされて居る。此の邊には武器、酒、ガラス、小麥が象牙、龜甲、犀角、椰子油と交換された。

印度洋の貿易風　紅海を出ると沿岸航路は一方はアラビア南岸に沿つて東に進み、Oman を廻つてペルシア灣に入り、或は東方印度に向ひ、一方はアフリカ海岸に沿つて、南下 Zanzibar 邊まで行つたが、こゝに注意すべきは印度洋の貿易風の發見のことである。Periplus によると Hippalus なる者が發見したので、夏期 (四月—九月) の南西風に彼の名が適用された、是に對し冬期の北東風は Volturnus と云ふ。貿易風或は季節風の發見によつて、アラビア南岸の Cana 或はアフリカ東岸の Cape of Spices と印度西海岸との直通航路が開けたことは東西交通に特筆さるべきことである。Pliny によるとアレキサンドリアからナイル河を溯り Coptos に至るのは順風 (Etesian wind)

十二日程、それから陸路 Berenice に至るのに十二日程、そこで仲夏 Dog star の上る前後に紅海を南下卅日程で海口の Ocelis に至り、それより Hippalus 風を利用して南印度西岸の Muziris 港に至るのに四十日程と記して居る。

ペルシア灣　ペルシア灣のことは Periplus よりも Strabo が詳しく記して居る。先きに Erythras 王のことを述べたが、それはメヂアの盛んな時代と云へば紀元前六世紀頃のことと思はれるが、なほ他にカルデア人が海賊として活動したので Sennacherib に攻められ（694 B. C.）ペルシア灣西岸の Gerrha（今 Koweit?）に移住した。この地はアラビアを東西に横斷する陸路の起點である。又フェニキア人の活動を記し、Gherd 岬の近くに Sidon or Sidodona と呼ぶ町があり、Bahrain 諸島中に Tylos or Tyre 及び Aradus の名があり、フェニキア式の墓が多かつたと云ふ。チグリス、ユーフラテス兩河口の地には Teredon, Charax Spasini（今 Mohammarah）があり、ユーフラテス河を少し溯ると Apologus があつた。Apologus は古くバビロン、アッシリア時代には Ubulu として知られ、後には Obollah となる。Peiplus 時代には Teredon が主要港であつたが、Strabo 時代には Apologus が再び盛んであつた。後漢の世、西域都護班超の命により安息 Parthia に使した甘英が行つた于羅國はこの Obollah であると云はれ、甘英はこゝで海を渡つて大秦卽ちローマ帝國に行くことを斷念したと云はれて居る。

ペルシア灣と印度　ペルシア灣を出ると西は Oman 地方で、こゝには西方から frankincense が Cana から來り、東方からは印度からチーク材、黑檀が運ばれて來た。ペルシア灣を出て東方に向つて大陸の海岸沿ひにインダス河口に至る航路はアレキサンダー大王の東征の時、部將 Nearchos がインダス河畔で大王にわかれて艦隊を率ゐて海岸沿ひにペルシア灣にかへり、チグリス河畔で大王に再會した有名な航路であるが、この航路はこの時に始まつたのではない。紀元前六世紀にバビロンの Nabonidas 王の月宮殿や Nebuchadnezzar 王の宮殿には印度のチーク材が用ゐられて居る。勿論船で運んだに相違ない。

印度沿岸とセイロン　Periplus, Ptolemy によると印度沿岸に多數の港名が記されて居るが、多くは今の地名との比定がハッキリしない。今その中主要なものをあげると、インダス河口に Barbaricum 港があり、印度半島部の西岸には北方に Barygaza（今 Broach）、南方に Muziris（今 Cranganore）があつた。西方から輸入されるものは前に述べたものと大差なく、衣料、ガラス、金銀貨及器物、乳香、蘇合油、塗油、酒、銅、錫、鉛、雞冠石（realgar）アンチモニー、珊瑚、topaz 等であるが、印度から輸出されるものは、Hindu-kush 山脈からヒマラヤ山脈にかけての山地の産物である薬用香料植物の costus, spikenard（甘松香）、bdellium, lyceium や肉桂及び印度の wool として知られた綿布や藍（indigo）それに支那から傳來した絹布、生糸、南方では malabathrum と呼ばれる肉桂及胡椒の他に南印度やセイロンは寶石の産地なので diamond, saphire, lapis-lazuli, beryl, ruby, spinel, turquoise, garnet, carnelian, 眞珠、象牙、加へるに南洋から來る龜甲であり、又チーク材、黑檀が Barygaza から大船でOmanに運ばれた。これ等の中で後世西歐人の東漸の一因となつた胡椒に就いて一言述べたい。胡椒はローマ人に盛んに食用に供され、かの Alaric がローマを圍んだ時、圍みを解く條件として出したのが、金五千ポンド、銀三千ポンド、絹衣四千、猩々緋の布三千、胡椒三千ポンドであつた。又 Pliny によると胡椒一ポンドの値段は 15 denarii（銀貨）であつた。又貨幣に就いては、ローマの金銀貨が印度で多數發見されて居る。マドラス州だけで金貨六一二、銀貨一一八七、Augustus, Tiberius, Caligura, Claudius, Nero のものが多い。或るローマ人がセイロン王にローマ貨幣の優秀を誇つた話が Pliny に見える。又 Pliny はローマ帝國が印度支那、アラビアに毎年 100 millon sesterces（銀貨 denarius の四分之一價）を費消し、その半分は印度に費消されたとも云つて居る。Muziris 港には Augustus の神殿があつたと傳へられ、コロマンデル海岸の Kaveri 河口にはローマの植民地があつた。Ptolemy の Khaberis emporium がそれで、今 Pondichery の南二哩の所に城壁に圍まれたローマ時代のガラス、寶石工場の遺跡がある。又傭兵としてのローマ軍人はタミール文學に稱賛されて居た。Strabo が Augustus 時代に紅海西岸の Myos Hormus

港を訪れた時そこに百二十人の印度行き商人を見た。ローマと印度との交通が如何に榮えて居たかは以上述べた所でわかるが、Nero を頂點としてローマの國勢が衰へるに從ひ東西交通も衰へて行つた。

馬來半島と南洋諸島　Periplus には Chryse 島の龜甲が印度に輸入されると記してあるが是は Ptolemy は Aurea Chersonesus "golden Peninsula" と記し、Pliny は Chryse promontory と記して居るが、今の馬來半島らしい。印度人は東方に產金地があり、金洲 Suvarṇa bhūmi, Suvarṇa dvīpa と呼んだが、是はビルマと思はれるがスマトラとする學者もある。ローマ人の黃金半島は金洲の反映であらう。ラテン語で chelys は tortoise を意味するが、先きの Chryse と關係はないだらうか。Ptolemy は南洋に多數の港、河、岬、島等の名を記して居り、それらが今のどこに當るかハッキリせぬが、その中に Jabadiu と云ふ島がある。是は梵語 Yavadvīpa のパーリ形 Yavadīpa の訛つたもの、法顯の耶婆提國で今の爪哇を指し、その意味は「大麥の島」であるが、この大麥には拘泥せず單に穀物豐產の島と解すべきである。とにかく名が印度名から來て居るのであるから始め南洋に侵出したのは印度船舶で、ローマ人がそれに追隨したと思はれる。

支那　Periplus には This と云ふ土地があり、そこに Thinae と云ふ內陸都市があるが、こゝは近づき難く、そこから餘り人が來ないと記してあるが、この Thinae の名は Eratosthenes が使つて居る。Ptolemy は一方に Sinae と云ひ、一方には Sera Metropolis と云ひ、海路の終點を Cattigara 港にして居る。Ptolemy が南洋から海路北上すべきを反對に南下させて居るのはその誤りの理由がわからぬが、この航路の終點 Cattigara は何處かに就いては學者の間に色々論議されて居る。自分は是は今の廣東ではなく、漢の交趾郡今のハノイと考へる、Cattigara は交趾郡の訛つたものかも知れぬ。後漢の延熹九年（166 A. D.）に大秦王安敦の使が日南徼外から來て象牙、犀角、瑇瑁を獻じたことは有名な話であるが、三國の吳の黃武五年（226 A. D.）にも大秦の賈人秦論なるものが交趾に來たので、郡の太守が孫權の所に送つて居る、是は以上に述べた如く、上代の東西交通、ローマと印度との交通が盛ん

であつたことを考へると少しも不思議に思はれない、決して唐突に起つた事件とは見えない。但し大秦王安敦（Antoninus）の遣使はローマ史料には見えぬ。又漢書地理志に記されて居る、王莽の使が黄支國に行き生犀を連れて歸つた話に就いては、黄支國を印度のコロマンデル海岸の Kanipura とする說が行はれて居るが、是には疑ひを持つ。自分は黄支は交趾の變形ではないかと思ふと云ふのは王莽はよく地名等の變更をしたことと、黄支國に行く途中經過した諸國の解釋が適當に出來て居ないからである。

吳と南洋　支那側の南洋に關する知識は三國時代に始まる。吳の孫權の使として康泰、朱應の兩人は扶南國に行つた。扶南國は今カムボジヤと交趾支那を含むメコン河下流域を占めた國で、使者は歸國後、康泰は吳時外國傳を書き、その中に諸薄の名が見える。諸薄は Ptolemy の Jabadiu で始めて支那に知られた爪哇の名である。朱應は南洲異物志を書いた。兩人が扶南に居る間に扶南から印度に遣はした使者が歸り天竺の樣子が傳へられ、月支の馬卽ち中央アジアの馬も天竺から贈られた。康泰等はその話を支那に持ち歸つた。是が南方から始めて傳はつた印度事情であつた。

印度人の南洋植民　Ptolemy の Jabadiu が印度名とすれば旣にその頃から印度人の南洋への發展が見られ、所謂 Hindu colony の最初からとも見えるが、碑文や遺物から見ると、安南の南部衞莊 Nha trang の西方の Sri Māra 家の岩石刻文が最も古いらしく、爪哇の Tanjong Priok 東方の河中の岩石に刻んだタルマ國王 Pūrṇavarman の刻文や、ボルネオ東部の Koetei 地方の Mahakam 河と Kaman との合流する所 Muara Kaman にあつた四ケの Yūva（犧牲をつなぐ柱）の刻文や附近の山洞にあつた遺物及び西ボルネオでは Kapuas 河流域で發見された遺物、馬來半島では Kedah と Wellesley 州內の遺跡遺物等は印度文化の傳播を物語つて居り、其の使用せる文字が南印度の Pallava 文字であることは南印度からの海上交通を示して居る。その他扶南の開國傳說にも印度人混塡 Kaundinya が賈船に乘つて來り女王柳葉と結婚した話もある。南洋の印度文化は印度敎と佛敎との混合で、相互に時代

的に消長があり、遺物遺跡も兩方あるがとにかく印度文化は南洋各地に廣く行はれたが、その中支那人の交通を促したのは佛教關係であつた。兩晉南北朝時代から隋唐にかけて、僧侶の往來が盛んであつた。東晉の法顯が師子國卽ちセイロンから耶婆提卽ち爪哇を經て歸つた話を初め、南朝と南洋佛教との交渉、佛僧の渡來、殊に唐の高宗時代義淨が海路東天竺に行つたが、彼の求法高僧傳によると相當多數の僧侶が中には高麗の僧も混じて、南洋に行き、天竺に行つて居る。義淨は又その頃南洋にはスマトラ東南部にシュリヴィジャヤ國（室利佛逝）（今パレンバン）やマラユ國（今ジャンビ）及び訶陵（今爪哇）等の諸國があつたことを記して居る。要之佛教を仲介としての東西交通は海上でも盛んであつたのである。

大食人の海上發展　印度人ローマ人ペルシア人の後をついで、東西交通に一段活氣を與へたのは大食人卽ちサラセン人の海上活動である。是は上代と云つては少し適當でないかも知れぬが以下簡單に概要を述べよう。サラセンの勃興は支那では唐代にあたるが、回教徒はペルシア征服後、ペルシア灣を發足點として、アジア大陸南方の海上を縱横に航海し、その商賈はペルシア人や印度人の足跡を追うて至らざる所なく、海上貿易を殆んど獨占した。彼等はエヂプトを征服して居り、紅海はメッカの門戸ジッダ港があるので異教徒が紅海に自由に活動するのを喜ばなかつたので、上代に於けるが如きギリシア人ローマ人の活動は頓に衰へたが、東アフリカ海岸はザンジバル邊まで行き、黑人奴隷を多數ペルシアに輸入した。この黑人奴隷は Zangi と云ひ、唐にも少數輸入され僧祇奴と記さる。宋代には鬼奴、崑崙奴など呼ばれたが、その中には馬來人も含まれて居る。ソマリランドやアラビア南岸の香藥は彼れ等の手にあり東方に貿易された。Basrah から運河で Ubullah に出て、チグリス河を Abbadan に下りペルシア灣東岸の Siraf, Hurmuz を經て海外に出で、東方に向ひ印度の西岸を下りセイロンを經て Hirkand 海（ベンガル灣）を横斷し、スマトラ西北端の藍無里 Lamuri（今アチェー）に達し、一方はスマトラ西岸を Barus まで下り、そこの龍腦を求め、一方はマラッカ海峽に出で、マライ半島の Kalah（今 Kedah）の錫を求め、更に北上して kakula 卽ち小荳蔻

を求めた。マラッカ海峽を東に進むと、Selahit（馬來語 Selat 海峽の義）卽ち今シンガポール海峽を通つて北上し、今の安南當時の占婆 Champa の沖を經て Lukin（今ハノイ）に寄り、更に北上をつゞけて Khanfu（廣府今廣東）に來たが、廣東から北上し Djanfu や Kanfu に行つた。Djanfu, Kanfu に就いては色々の說があるが自分は是は揚州江都で同一地を指すものと思ふ。回教徒は支那流に同じ場所の地名がいくつもあるのを誤解して別の地の樣に思つたのではあるまいか。かくて七つの海を渡つて來た回教徒は廣東で蕃坊と居留地に住み、都蕃長に治められ、又そこに懷聖寺と塔を作つた。この塔は回教寺院の Minaret で上部は破損して居るが今日まで殘り世界でも古い Minaret 卽ち光塔の一つである、唐代創建の說があるが、北宋時代のものではあるまいかと云ふのは唐末に廣東に來た Suleyman の旅行記に塔のことが記してないからである。回教徒は南洋の大國として Zabag の名をあげ、その Mahārāja 卽ち大王のことを記して居るが、是は宋人の云ふ所の三佛齊國らしい。三佛齊國はスマトラ東南部の國であるが、マラッカ海峽を制壓して居たもので、交通の要衝を占領して居た。從つて三佛齊國から宋に貢獻した品目を見ると、龍涎一塊三十六斤、眞珠一百一十三兩、珊瑚一株二百四十兩、犀角八株、梅花腦板三片、又梅花腦二百兩、琉璃三十九事金剛錐三十九箇、貓兒眼睛指環、靑瑪瑙指環、共十三箇、臘脝臍二十八兩、番布二十六條、大食糖四琉璃瓶、大食棗十六琉璃瓶、薔薇水一百六十八斤、賓鐵長劍九張、賓鐵短劍六張、乳香八萬一千六百八十斤、象牙八十七株、共四千六十五斤、蘇合油二百七十八斤、木香一百一七斤、香三十斤、血竭一百五十八斤、阿魏一百二十七斤、肉荳蔻二千六百七十四斤、胡椒一萬七百五十斤、檀香一萬九千九百三十五斤、箋香三百六十四斤。以上は南宋の紹興二十六年（1156 A. D.）の貢獻品を一例としてあげたにすぎないが、その內容の豐富なるには驚くのであり、皆回教徒が貿易した品々であり、國使には回教徒が混じて居る。南宋の趙如适の諸蕃志に南方海上諸國や物產が東西に亙つて詳しく記されて居る故、前記の貢獻品の一つ〳〵の說明は諸蕃志を見るとよい。

さてサラセン人の東方發展はやがて支那人の西方發展を促す。唐末賈耽の道里記の中に廣州からペルシア灣に至る

詳しい航路記事があるのと對照して回教徒 Ibn Khordadzbeh の道里記がありリペルシア灣から支那へと反對の航路を記して居るので相對照して得る所が多い。支那船がペルシア灣に航海したことも回教徒の記錄に見える。羅針盤の使用はサラセン船舶の海上發展に大きな影響を與へたと思はれるが、一方支那でも造船術の發達が宋代に著しく、唐代の受け身の形とちがひ、宋以後は積極的に支那船が南洋に活動し、それが元の南海經略となり、明初鄭和の大航海となつて行くのである。又宋人の活動は商業的であつて、市舶條令と云ふ貿易の規則が制定され、市舶司と云ふ役所も貿易港に設置されたことは海外貿易の確立されたことを示し、元もその利を認め宋の制度を踏襲し、一時は官營資本を商人に貸して海外に貿易せしめたこともある。要するに貿易を主とした近代的東西交通は支那側では大體宋代に始まつたと云つてよい。

最後に手許にある參考書を拾つて此の稿を終ることとする。

1. The geography of Strabo by H. C. Hamilton.
2. The Historic of the world commonly called, the natural Historic of C. Plinius secondus by Ph. Holland.
3. The geographia of Ptalemueus.
4. W. H. Schoff, The Periplus of the Erythraean sea.
5. M. P. Charlesworth, Trade-routes and commerce of the Roman Empire.
6. E. H. Warmington, The commerce between the Roman empire and India.
7. H. G. Rawlinson, Intercourse between India and the Western world from the earliest times to the fall of Rome.
8. W. Vincent, The commerce and navigation of the Ancients in the Indian ocean.
9. G. Ferrand, Relations de voyages.
10. G. E. Gerini, Researches on Ptolemy's geography.

11. M. Reinaud, Relations des voyages.

12. E. Renaudot, Ancient accounts of India and China by two Mohammedan travellers.

13. C. Barbier de Meynard, Le livre des routes et des p.ovinces par Ibn Khordadbeh.

14. Maçoudi, Les prairies d'or.

15. F. Hirth and W. W. Rockhill, Chau Ju-kua.

16. 藤田豐八，東西交涉史の研究，南海篇，及島夷志略校注。

17. 桑原隲藏，蒲壽庚の事蹟。